

閉館十五分前

たなか鮎子



図書館の長い廊下を、Dは数冊の本を抱えて歩いていた。ふたつめの角を曲がり、つきあたりの特別書庫にこの本を収めれば、今日の仕事は終わりだ。書庫の鍵を警備員に渡したあと、事務室に戻ってタイムカードを押す。毎日きまって繰り返される司書としてのルーティンをぼんやりと思い描きながら、Dは機械的な歩調で閲覧室を横切った。

ふと、部屋の隅の人影に目を留め、Dは立ち止まった。一人の男が、奥のテーブルで熱心に本をめくっている。両脇には、数十冊の本が中世に建てられたいびつな塔のように積み上げられ、何かのはずみで崩れ落ちるのを、今か今かと待っていた。数センチそばで起ころうとしているそんな悲劇の前触れに気づきもせず、男は、目の前に広げた大きな辞典に夢中で目を走らせていた。

ただし、その男がDの注意を引いたのは、積み上がった本のためではなかった。こちらに向けられたその背中、見覚えのある後ろ姿が、彼女の足を止めたのだ。似ている。Dは思った。神経質に丸まった細い肩、落ち窪んだような頭の形まで、死んだ彼女の恋人にそっくりだった。Dは本を抱えたまま、注意深く男の背後にしのび寄った。司書が閲覧者に話しかけるのは、別段変わったことではない。しかも閉館二十分前ときている。気になる相手でなくとも、一言掛けるべき時間帯だ。

Dが口を開くのと同時に、男がふり返った。Dは、あっと声を上げてのけぞった。持っていた本がバラバラと床に落ち、四方に散らばった。振り返った顔は、まぎれもなく死んだはずの彼女の恋人だった。男は、状況の掴めぬ様子でしばしDを呆然と見つめていたが、いきなりさっと青ざめたかと思うと、きまり悪げに下を向いた。

時が止まったような沈黙のあと、やがてDが口をひらいた。

「どうということなの？」

声は震えていたが、この際、そんなことはどうでもよかった。Dは、うつむいている男の横顔を凝視しながら、数年前の冬を思い出していった。

雪の降りしきる教会の墓地。数人の友人と、親族とおぼしき人々が見守る中、漆黒の箱に納められた彼の恋人は、静かに地の底へと降りていった。最後に触れた棺の冷たさを、Dは今も覚えている。それは、中に横たわるその人自身を思い起こさせるものでもあった。

生前、彼との間にいい思い出はほとんどなかった。温もりある言葉のひとつすら、かけてもらった記憶はない。建築学を専攻していたFとは、大学の講義で出会って以来つきあうようになった。クリエイティブな思考や、断片のような理想がないことはなかったが、行動力に乏しく、優柔不断で、何かをきちんと最後までやり遂げることでできない性質だった。そのくせ、自尊心だけはどうにもならないほど強かった。疑りぶかく、いつも不満げで、自分の殻に閉じこもってふさぎこむことも少なくなかった。Dとは一年余りのつきあいだったが、その間、Fが彼女の心を明るくさせたことが何度あっただろう。むしろ無口なDの我慢強さにつけこんで、当たり散らしたり、手を上げることもしばしばだった。全体、ひどい男だった――

それでもDが彼を見捨てずにいたのは、Fなりに、Dの存在をそれなりに必要としているらしい、と感じさせられる瞬間があったからだ。時折ではあったが、言いようのない切実さのようなものが、Fから伝わってくることもあった。底なしの奈落に足を滑らせないよう、何かを必死でつかもうとするような……薄暗いところから這い上がろうとするような、真剣さを垣間見ることがあった。そして、(稀にはあるが)それがDの援助によって成し遂げられる日が来るかもしれない、そんな希望を抱かせられるような瞬間が、まったくなくともなかった。

そんなわけで、その死に一抹の寂しさを感じる程度の愛情をDが抱いていたことも、一方で、葬儀に参列する人の数がまばらだった上、実際そのほとんどがFではなく、Dのために出席していたことも、まぎれもない事実であった。そして、そこにいたすべての人間が、彼が不慮の自動車事故に遭って死んだことの証人でもあった。無論、今日こうして、Dの勤める図書館でFと顔を合わせることなど、ありえない話だった。

では、目の前にいるこの男は、一体何者なのだ？

その時、男がうつむいたまま口を開いた。

「話せば長くなるんだ」

静かで落ち着いた声だった。まぎれもなくFのものだったが、どこか不思議な透明感のある音色を伴っていた。

「時間がないんだ。今はどうしても、ゆっくり話せない。大切な使命があるんだ」
男はそう言う、思い切ったように顔を上げた。Dは息を飲んだ。その額から右のこめかみにかけて、事故で負った長い傷跡が残っているのが見えたからだ。

「やっぱり、あなたなのね？」

言った途端、足ががくがくと震えだすが、D自身にもわかった。Fはさっと立ち上がってDのそばへ来ると、その背中を支えた。

「座れるかい？」

Dはうなずくと、男が引いた椅子に、放心したように座った。Fも、隣の椅子にそっと腰を下ろした。

「その傷」